

しい曲を吹いてゐた。

一八八

私の室に伊藤さんといふ盲生徒が居た。國は栃木縣である。御両親は相當教養のある人らしく、お母さんから毎月お手紙をいたゞいて居たが中々達筆であつた。私が伊藤さんに、  
「君のお母さんは字がお上手だねえ」  
といつたら、

「母は跡見女學校を出てるんです。父は早稻田を出ました」  
と云つてゐた。

伊藤さんは民笛がうまかつた。盲學校に入る前、村で祭がある時は、伊藤さんは若い衆に頼まれて山車に乗つて笛を吹いたさうである。盲目の少年が賑やかな祭禮の山車に乗つて、鉦や太鼓と調子を合せながら笛を吹いてゐる姿を想像したゞけでも平和な感じがする。

寄宿生の中には、バイオリンを弾く人も居たし、ハーモニカを吹く者も居た。然し尺八の吹ける者は一人も居なかつた。さうかといつて尺八が嫌ひな譯でもない。音楽科で組織してゐる樂々會では、春秋の二回に學校の講堂で演奏會を開くことになつてゐる。その時には尺八も出る。先生は水野呂童氏である。

「一體どこで息を切るんだらう」

と、私たちは感心してきいてゐた。音樂生にいはせると、水野先生の尺八の音色はとても上品だといふ。生徒たちは先生の人柄に親しみを持つてゐたやうだ。

或る年、震災前であるが、當時童謡界を風靡してゐた本居長世氏の令嬢が來校して出演されたことがある。その時吉田晴風先生が本居先生のピアノに尺八の助奏をされた。ピアノと尺八の合奏をきいたのはこれが初めてである。

私たちのクラスに池谷さんといふ盲生徒が居た。大人しい人であつた。池谷さんが尺八を吹き初めたのは何時頃だつたか忘れてしまつたが、六段の中の一段のその又四分の一位の所を吹いてゐた。何時になつてもそれきりである。それでも池谷さんが尺八を吹くと、「いゝなあ」といつて感心してきいてゐたものだ。他の盲生徒が、

「池谷さん、もつと吹いてくれないかい」  
といふと、

「これでおしまひだ」  
といつてちよつぱり吹くだけだつた。

一八九

「尺八には孔がいくつあるんだい」

と誰かどきくと、

「五つだ。前に四つ、後ろに一つあるんだ」

「少ないもんだなあ。僕はもつと孔があると思つた。それでてこない、音が出るのかなあ」といふと、

「そこが難ぶかしいところなんだ」

と勿體をつけてゐた。池谷さんは本科だけで學校を出てしまはれたので、それからは又尺八をきく機會が無くなつた。

ところが私が師範部二年生の夏休みに歸郷した時、親友の齋藤君の家へ遊びに行つたら何時何處で求めたのか一本の尺八を持つてゐた。當時、齋藤君は早稻田の學生だつた。

「吹けるのか」

ときいたら、

「どうして巧いもんだ」

といふ。

「ぢや、一つ吹いて見ろ」

と云つたら、齋藤君はあぐらをかいたまゝ尺八を口にあて、歌口の所をべろく、な管めてゐる。

「管めないと言が出ないのか」

ときいたら、

「音に潤ほひをつけるんだ」

と勿體振つてゐる。

「どれ」と云つて齋藤君は樂譜を擴げた。見ると假名の上に棒が引つ張つてあるので何だか書き間違へて消したやうだ。

「これか、譜は」

ときいたら、「さうだ」といふ。

「この字の上に棒を引つ張つてあるのは何んだ」ときいたら、

「拍子だ」

と云ふ。

「尺八の楽譜つて見たところ穢ないもんだなあ」と云つて笑つた。

齋藤君も六段の中の一段でおしまひだ。

「もつと吹け」

と云つたら、

「こゝからが難づかしいんだ」

と云ふ。私は尺八は難かしいもので常人には吹けないものだと思つてゐたが、齋藤君にも吹ける位なら私にも吹けないことはあるまいと思つた。

「尺八は高いものかね」

ときいたら、

「うん、これは十圓した」

といふ。

「へーえ、高いもんだなあ。俺は一圓か二圓位だと思つてゐた。これはたゞの竹だらう」ときいたら、

「いゝのは何十圓もするんだ」

といつて、片手で尺八を持ち、片つ方の手で拳を作つて尺八を持つてゐる手の甲を叩くと。眞ん中からすつぽり半分に分れた。

「へーえ、つないであるのか」

ときいたら、

「これは中なま継ぎといつてな、組み立て式になつてゐるんだ。上等物はみんなこれだ」

といつて袋の中に藏しまつた。

「でも繋いである所から息が洩れないかね」

ときいたら、

「大丈夫だ、洩れないやうに出来てるんだ」

といふ。

私も尺八が欲しくなつた。私は齋藤君に尺八を買ふまで貸してくれないか、と言つたら、齋藤君は快よく貸してくれた。露拭きまで貸してくれた。今になつて齋藤君は買ったばかりの尺八をよく惜し氣もなく貸してくれたものだと思つてゐる。私は尺八を寄宿舎に持つて歸つて、暇さへあれ

ば稽古をしてゐた。初めは頭がぼうつとして眼が眩んだ。部屋の者たちは笑つてゐた。君が代がやつと吹けるやうになつたら、同室の音楽生が、

「大分音が出るやうになつたから、先生に就いて習つたらいいでせう。でないとい流になつて何時迄経つても上手になれませんよ」

と忠告してくれたので、尤もな話だと思つて尺八の先生を捜したが学校の近所には見當らなかつた。初め、水野呂童先生が頭に浮んだが、あゝいふ偉い先生は自分のやうな盲学校の生徒になんか教へてはくれまいと思つて諦らめた。だが、出来ることなら立派な人格の先生に習ひたいものだと思つてゐた。或る日、商科大学に在學の知人から音楽會のプログラムを送つて來た。見ると同大學々生の尺八曉風會の演奏會だ。場所は青山會館とある。曲目に一通り眼を通すと、一番おしまひに吉田晴風先生の名が出てゐた。この先生なら一度盲学校にも來られたことがあるので知つてゐる。あの時はピアノの伴奏だつたが、これは琴と合奏だ。曲目は「谷間の水車」と「春の訪づれ」だ。そこで、當日、盲生徒二人を連れて聴きに行つたが、大したものだつた。奇體なもので、それから間もなく或る寄宿生が蓄音器を買つたら、樂器屋が景品にレコードを一枚つけて寄こしたさうだが、それが意外にも吉田晴風先生御吹込みの「千鳥の曲」であつた。私はそのレコードをきいて

益々先生に傾倒してしまつた。所が又耳よりな話をきいた。音楽科の野本さんといふ女生徒が宮城道雄先生のところへ琴を習ひに行つてるといふのである。當時は未だ宮城先生も盲学校に關係を持つてをられぬ頃で、音楽生で先生の所へ習ひに行くなどといふことは前例のないことであつた。恐らく野本さんが初めてではないかと思ふのである。私はシメタと思つて野本さんに向ひ、

「宮城先生から吉田先生に私のことをお頼みして貰へないものでせうか、一つ先生に伺つて見て下さいませんか」

とお願ひしたら、

「ええ、よございますわ」

と快よく承諾して下さつた。だが、いくら野本さんが愛想よく引き受けても、見ず知らずの者を果して先生が吉田先生に御紹介して下さるかどうかが危ぶまれた。一方、氣休めを言へば宮城さんも盲人なのだから同病相憐れむで盲学校の生徒のことなら特別骨を折つて下さるだらう、などと蟲のいゝことも考へてゐた。私が首を長くして待つてゐると、やがて野本さんがお稽古から歸つて來た。そして言はれるには、

「先生にお伺ひしましたら、吉田先生は目下御旅行中なんですつて。それでお歸りになつたらお話

しておきますつて仰言ました」

といふ譯で何だか食ひ足りないやうな気がした。

それから暫らく経つて思ひがけなく吉田先生からお手紙をいたゞいた。幸ひその手紙を今でも持つてゐるので文面の一節を左に記載して見やう。

お手紙拜見いたしました。あなたのことは宮城君からも話を承つてをりまして、御熱心御希望と  
のことで、私もうれしく出来るだけおわかりになるやうお教へしたいと思つてをりました。下略  
私もこれで親舟に乗つたやうな気がした。そこで私は早速先生の所に行つて見た。先生に初めて  
お目にかゝつた時の印象は「ノンキな父さん」といふ感じだつた。でつぶり肥つた血色のいゝ赫ら  
顔で頭の毛が薄くて電気でテカ／＼光つてゐた。そして始終ニコ／＼してをられた。(私は其後數  
年先生に師事したが先生の怒つたお顔を見たことが一度も無かつた、又先生から人の悪口をきいた  
ことも一度も無かつた)

その頃、私は齋藤君に何時までも尺八を借りてゐては濟まないと思つて、友人に頼んで十八圓の  
尺八を買つて持つてゐたので先生に御覽に入れたら、先生はブ／＼吹かれて、

「これなら一年位は使へませう」

と仰言つた。なるほば先生の御鑑定は偉いもので、其後少し経つと此の尺八では満足出来なくな  
つて新たに七十圓の尺八を買ふやうになつた。

さて、正式に尺八を習つてゐる中に、自分ばかりで楽しんでゐるのが勿體ないやうな気がしたの  
で、生徒の中から希望者を集めて尺八の會を作ることにした。だが、こゝに一寸心配なことが三つ  
あつた。

その一は、盲學校では月謝を取らない。月謝無しの學校の生徒が、尺八の月謝を拂ふのは苦痛で  
はないかといふことである。それから誰も尺八を持つてゐないので、習ふとなると新たに尺八を買  
はなければならぬ。それには少なくとも二十圓位は出さなければならぬ。次の問題は點字の樂  
譜を作ることだ。初めて尺八會を組織した時、約十三、四名の會員が集まつた。少ないやうだが全  
校生徒二百名の中、半數が女生徒と初等部の生徒とすると尺八を吹ける者は百名となる。その中の  
一割三、四分が會員なのだから少ないとは言へない。會費は一人當り月一圓とした。だがこれでは  
會員全部の月謝を集めても先生に差上げる御禮は足りない。そこで不足分は私が當時師範部の三年  
生で月々官費を貰つてゐたのでそれで補なふことにした。尺八の購入に就いては吉田先生の御盡力

で月賦で買ふことにした。尺八の點字樂譜は同級の小椋<sup>コウキ</sup>さん其他と相談して考案したが、これには大分頭を捻つた。講師には初め吉田先生の高弟景山彰氏がなられたが、後間もなく廣門伶風氏が代つて教授の任に當られた。會員は熱心に稽古をした。

發會して三、四ヶ月経つてから演奏會を開いた。勿論會員は六段一曲しか吹けないのだが、あとは大家諸先生の贊助御出演を乞へばいゝとどこまでも心臓を強くして開催したのである。目的とするところは唯だ會員に良い音楽をきかせて鼓舞激勵するにある。當時の贊助出演諸氏の顔觸れを見ると、學校側から故萩岡松韻先生、千布豐勢先生、池田蝶子先生其他音楽科の先生全部、外部からは御大吉田晴風先生や宮城道雄先生などで實に堂々たるものである。而も開會の劈頭には、音楽理論家として世界的の權威、田邊尙雄先生が御講演して下さつたのだ。當日は盲學校初まつて以來と老小使さんが言つてたやうに稀に見る盛會であつた。是れ偏へに諸先生の御盡力の賜物である。私は此の時の經驗で演奏會を開くことは實に大切なものであると思つた。會員相互の團結力を固め、又出演のために猛練習をするからだ。演奏會を開いたのは二月である。まだやりたいと思ふことは色々あつたがその翌三月に卒業してしまつた。

## 笛の音

今日では盲人を見ると按摩さんといふが、盲人が按摩をやり出したのはさう古いことでもないらしい。室町時代に明右覺一といふ盲人が居て、平家琵琶の大家であると共に按摩や鍼の道にも長じてゐたといふことが或る本に書いてあつたが、明石檢校が琵琶の名手であることは事實としても、按摩をやつたといふことはどうも信用が出来ない。又、神武天皇の御代に盲人救済のため盲人に按摩を教えたとある。即ち十歳から按摩を學ばせて二十年間修業の後、三十歳になつて營業をさせたといふのであるが、これも眞偽のほどは分らない。按摩と一概に言つても昔の按摩と今日の按摩とはやり方が全く違ふのである。支那の按摩が初めて日本に傳はつて來たのは欽明天皇の御代であるといふ。支那には昔から按摩があつたらしい。五千年の歴史を有するといふ。然し支那の按摩に天竺按摩や婆羅導引などといふ名のある所を見ると印度から支那に傳はつたらしい。古代印度では僧侶が按摩をやつてゐたさうである。支那の按摩と日本の按摩はやり方が全然違ふのである。支那のは今日のラヂオ體操に似てゐる。學校でやつてゐるスエーデン體操は、支那の昔の按摩とそっくり

ださうだ。それでリングがこの體操を完成した時、これは支那の按摩の模倣であると云つた學者もあつたさうだ。尤もリングは、その研究資料を古代ギリシヤの醫書や古代ローマの大醫ガレーノスの著書から得たと言つたさうだが、ギリシヤの醫學の中に支那の醫學が割り込んだのかも知れない。醫聖ヒポクラテスの師友であるギムナステンのヘロディオスが創始した醫療體操は支那の按摩を取り入れたものだと言はれてゐる。マッサージといふ語原も或る學者の説では、支那のマッサージから轉訛したのだらうといふことである。支那の或る地方では按摩のことを方言でマアサーと言つてゐるさうだ。兎に角支那の按摩は非常に古い歴史を持つてゐることだけは事實である。

我が國で初めて醫學の教育が行はれたのは文武天皇の御代である。按摩も醫學の中に加はつてゐる。即ち紀元一三六一年の大寶元年に大寶令の制定があり、その中に醫疾令の規定があつて、宮内省の中の典藥寮で醫學の教育が行はれたのである。醫科の中に、内科、外科、小兒科、耳目口齒科の四科があり生徒は全部で四十名である。醫科の外に按摩科、鍼科、女醫科、呪禁科などがあつた。按摩科は生徒が十人で修業年限が三ケ年だ。一番年限の長いのは内科(體療)と鍼科で各七年、外科(創腫)と小兒科(少小)が各五年、耳目口齒科が四年だ。これを見ても内科と鍼科が當時重要視され

てゐたことが分る。按摩科の修業年限三年は短かいやうだが、耳鼻咽喉科眼科齒科を一と擲げにして四年といふのから見れば、大して見劣りがしないだらう。尤もこれは支那の制度に倣つたのである。各科には博士と師が居た。醫科には醫博士、醫師、按摩科には按摩博士、按摩師といふ風に。博士は各科に一人宛、師は生徒の數によつて多寡がある。例へば醫師は十名、按摩師は二名といふ風に。博士は學校の先生の官名で今日の博士とは意味が違ふ。博士は師の中から優秀な者を選んで任命するのである。

斯うして按摩も大寶令には立派な醫術として認められてゐたのであるが、何時の間にか此の術が廢たれて醫育制度の中から除外されてしまつたのである。紀元二千年、後村上天皇の御代に北畠親房が著はした「職原抄」の中には醫博士、鍼師などの職名は載つてゐるが、按摩に関する職名の記載されてゐない所を見ると、既にそれ以前に按摩科が廢止されてゐたのではないかといはれてゐる。兎に角、平安朝から鎌倉、室町、安土桃山時代を経て江戸時代に至る迄の間に、按摩は醫家の手から離れて民間に移り養生法として行はれてゐたらしいのである。

それでは何時から按摩が盲人の手に移つたかといふと、江戸時代の中頃か、或ひはその前後あたりではないかといふ説がある。鍼が盲人の職業になつた年代は明らかになつてゐるが、按摩の方は

どうもはつきりしてゐないのである。まあ鍼が盲人の手に入つたので按摩も續いて手に入つたと思へば間違ひがないだらう。一體、鍼術は大寶令の醫育制度を見ても分るやうに、内科と並び稱せられた重要學科で、修業年限も内科と同じく七年であつた。その學理は深遠で、難解のものとされ技術は高尚と思はれてゐたのである。それが盲人の手に渡つたのだから按摩が盲人の手に入らぬ筈が無からう。鍼術を最初に盲人の職業としたのは山瀬琢一檢校である。この山瀬の弟子が有名な杉山和一檢校である。

斯う言つた譯で、今では按摩は盲人の代名詞のやうになつてゐるが、これも江戸時代後のことで、それ以前には盲人を見ても按摩などとは言はなかつたのである。

私は自分が盲學校に入るやうになつてから按摩さんの笛の音をきくと妙に淋しい氣持がする。何だか私の運命を笛が占つてゐるやうな氣がする。冬の夜など遠くの方から笛の音が流れて來ると、こうして火鉢にあたゝまつて安閑としてゐるのが申譯ないやうな氣がする。音樂には色々悲しい曲もあるであらうが、私は按摩さんの笛の音が何より悲しく淋しく感ずるのである。按摩さんの笛の音ほど、私の心を凍らせるものはない。

私が子供の頃、母が肩が凝るからといつて丁度笛を吹いて外を流してゐた按摩さんと呼んで肩を揉んで貰つたことがある。母は肩を揉んで貰ひながら按摩さんに何時眼が見えなくなつたかときいてゐた。私が眼が悪かつたので他人のことゝも思へなかつたのであらう。

按摩さんは外を流してゐると犬が吠えたり、子供が石を打つつけたりして困るなどと云つてゐた。母は心から同情してゐたやうであつた。

夜、私たち子供が寢床に入つたあとで母は父に向つて話しをしてゐた。私は眠つたふりをして凝つと耳を澄まして聽いてゐると――

「今日來た按摩さんは丁度繁(私)の年頃に眼が悪くなつて、見えなくなつたと申して居りました。繁の眼も何とかならないものでせうか」

父はしばらく黙つてゐた。そして、

「繁は眼を冷やしてゐるか」

とたづねられた。

「はい、學校から歸つてくると遊びにも行かないで罨法してをります」

「薬はまだあるか」



薬といふのは水薬である。毎食後に飲むのである。これは父が醫者だから自分で調合してくれるのである。

「はい、まだ一回分位はあります」

父は何とも言はなかつた。

「繁は今日は障子の棧が見えないと言つてをりました。あのう治るのでせうか」

「うん、だんく、良くなつてくる」

と言つた父の聲も何だか暗いやうな気がした。

母の不幸な豫感は當つた。私は何年か経つて盲學校に入るやうになつた。

いつのことで有つたが年月は忘れてしまつたが、私の室へ、村上さんといふ半盲生が新たに入つて來られた。當時、中等部の生徒であつた。年の割に落ち付いてゐて非常に慇懃なので普通の生徒と何處か違つた所があると思つてゐた。村上さんは物理が好きで、盲學校の物理だけでは満足が出來ないから物理學校の夜學へ通つて勉強したいと云つてをられた。眼は幼少の頃は悪かつたが、近頃は大分良くなつて讀書してもあまり疲れなくなつたと云つてをられた。其後村上さんは遂に物理

學校の夜學に通はれた。私はこれまですいぶん多くの人と付き合い合つて來たが、村上さんのやうな眞面目な人に遭つたのは初めてである。

或る晩、村上さんと二人で勉強してゐたがふと何かのきつかけから身の上話が出た。

「僕は老けて見えませんか」

と村上さんがきかれた。

「いや別に老けてると思ひませんが落付いてますねえ」

といふと、

「そんなこともないでせうが、これでも此の學校に入るまでは苦勞をして來ました」

「苦勞つてどんな苦勞ですか」

ときくと、

「僕の國は小田原の在なんです。それで小學校を出ると小田原の按摩さんの家に住み込んで按摩を習ひ、町を流して歩きました」

といはれた。

「辛かつたでせうねえ」

「はい、冬の晩なんか笛を持つてゐる指が凍りさうでした」  
私は笛ときいて心が痛くなつた。

「あなたも笛を吹いたのですか」

「ええ、毎晩笛を吹いて流して歩いたんです」

「あの笛の音は淋しいですねえ」

「ええ、でも仲間の按摩さんが笛を吹いて來ると懐かしいですよ」

「懐かしい？ どうしてですか」

「笛の音で誰が吹いてゐるか分るんです」

「人によつて音が違ふんですか」

「ええ、吹き方が違ふんです」

それもさうかも知れないと思つた。私はラチオで尺八を聴いてゐると、琴古流だか都山流だか大概分る。それと同じやうに笛の音も馴れれば誰が吹いてゐるか、聞き分けることが出来るのであらう。

「こちらが笛を吹くと向ふでもそれに應へるやうに吹きます。お互ひに吹き合ひながら段々近づい

て來て、道の真ん中で會つて話し合ひます。お互ひに辛ひ思ひをしてゐるので笛の音を頼りに出會ふのは懐かしいものです」

と語られた。落合直文先生の歌に

原町にめしひ二人が杖とめて

秋の夕暮何語るらむ

といふのがある。

「僕は小田原で苦しい目に遭つてをりますので、どんな不幸にも<sup>た</sup>泳えられると思ひます。笛を吹いて流して歩いたことを思へばどんなことでも出來ます」

としんみりした調子で申された。村上さんはその言葉の通り盲學校も立派に師範部を卒業されて某盲學校の先生になられた。按摩さんの笛の音は聴く者には斷腸の思ひであるが、吹く身には心の鍛錬になるのであらう。

## 天真爛漫

今でも在校當時の友人で親しく交際してゐるのは、中村さんや村上さんなどである。中村さんは午前中は某大學病院に勤務され、午後は町の或る外科病院で働いてをられる。視力は可なりある。お國は九州で元郷里の農學校に學ばれたさうであるが、眼が悪くなられたので盲學校に入られたのださうである。中村さんは漢文が好きで、盲學校に在學の頃は、個人教授の所へ漢學を習ひに行つてをられた。中村さんの兄さんは支那通として知られ、某大學の教授をしてをられるが、中村さんもさういつた素質を持つてをられたのだらう。お兄さんが昔長患らひされた時の話であるが、或る日、中村さんは何かのことでお兄さんに逆らひ、寢てをられたお兄さんに殴られたさうである。その時中村さんは、兄さんにまだこれだけの力があるかと、擲られながら涙を流して喜こんださうである。

頭のいゝ人が盲學校に入ると人一倍煩悶するものである。中村さんもその一人だ。當時、中村さんの愛讀されたのはロマン・ローランの「ジャン・クリストフ」で、これは數回繰返して讀んだと

云つてをられた。私は在學當時、中村さんから「ミケランゼロ」と「ミレー」の傳記を二冊貰つたことを覚えてゐる。

中村さんに就て斯ういふ話がある。中村さんが盲學校を卒業してから、以前厄介になつた下宿の小母さんに是非遊びに来るやうに言つてやつたさうだ。下宿の小母さんは中村さんの親切に感じて喜こんで訪ねて行つたら、省線の驛まで迎へに出た中村さんは、小母さんを俥に乗せて家に案内し至れり盡せりの歡待をしたさうである。あとで小母さんは私に向つて、

「あゝいふ御義理の堅い人はありません。妾も嬉しくて涙がこぼれました」  
といつて中村さんを褒めちぎつてゐた。

斯ういふ人情家なので、そこを附け込んだ譯でもあるまいが、後輩の者がよく中村さんの所へ無心に來る。中村さんは嫌とはいへない性分なので、何時でも貸してやられるさうだ。或る時など、隣室に居られる奥様の所へ行つて、

「おい、金を寄せせ」

といはれたら、奥様が眼で「いけません」と斷はられたので、

「なすつめ」

と奥様に拳骨を呉れて、懐ろから財布を強奪して又部屋に戻り、

「これでよかつたら」

と云つて全部貸してしまはれたさうだ。又或る時は、無心に來ても金が無かつたので、たゞ歸すのも氣の毒だと思ひ、よそから貰つた蜜柑一箱を臺所から持つて來て、

「これを遣るから今日は勘辨して呉れ」

と言つて詫びられたさうである。

「奥さんと喧嘩をしますか」

と私がきいたら、

「ええ、始終喧嘩をします」

と答へられた。

「あんな大人しい奥様を苛めるなんて酷いですなあ」

「なあに、あいつは私に食つてかゝるんです。組み付いて來るんですよ。ひつば叩いても效き目がありません」

「でもあなたが悪いんでせう」

「そりや私が悪いに決まつてまさあ」

と中村さんは笑ひながら、

「もとはよく本でひつば叩いたものですが、近頃は本がいたまないやうにこゝんところで打ちます」

と云つて私の机の上にあつた本を取り上げて、本の持ち方と叩く眞似をして見せた。

或る日、中村さんの所に居る看護婦さんが私の家へ遊びに來た時、面白い話をきかせてくれた。

「先生（中村さんのこと）はね、よく奥様と喧嘩をなさるんですよ。その時は私が仲裁に入りますの」

「さうですかなあ、やつぱり本當なんですな」

「ええ、凄いですよ」

と言ひ方が大袈裟だ。

「この間は面白かつたですよ、ホホホホ」

と看護婦さんは、まだ話さない中から笑つて、

「先生がねえ、又癩癩を起して奥様をお打ちになつたんです」

「へーえ」

「あとで先生が臺所に行かれたら、女の人が躓がんで泣いてゐるので、先生は田中さん（看護婦さん）だと思はれて後ろから優しく言葉をおかけになつたのです」

「何んでですか」

「あなたどうかなさつたんですかつて」

「さうしたら？」

「先生が聲をおかけになつてもまだ袂を顔に當て、泣いてゐるので、先生は御心配になつて、あなた、どこかお悪いんですか、何か悲しいことがあつたら私に仰言つて下さい、出来るだけのことにして上げますから、とそれはくやさしい言葉でおたづねになりましたの」

「へえ」

「すると今迄泣いていらつしたのは奥様でせう。奥様は先生が猫撫で聲で慰さめるので可笑しくなつて思はず笑つて隣の部屋にお逃げになりました。さうしたら先生は、やあ田中さんだと思つたらなあんだお前か、お前なら放つて置いたに、一杯食つたぞと云つて笑つてをられました。先生のいゝ所はどんなに怒つてもあとで謝まられるのです」

と言つて笑つてゐた。私も思はず笑つた。天真爛漫な人だなあと思つた。この中村さんが何時だ

つたか私の家へ遊びに来た時、

「家内とはよく喧嘩をしますが、みんな私が悪いんです。私は時々家内は私のやうな野蠻な人間の所へ来る女ではないと自分が恥かしくなることがあります」

と云つてをられた。これが中村さんの本當の氣持であらう。私も奥様には度々お目にかゝつたことがあるがおとなしい上品な方である。立派に女學校も出てをられるし御實家の寫眞を見ても温室などもある所から察して相當な家庭であることが分る。御親戚から大臣を二人も出してゐる位だから大したものだ。私が、

「奥様を大事にして上げなさいよ」

と云つたら、

「この間割烹着をこしらへてやつたら叱られました」と言はれた。

「どうしてですか」

ときいたら、

「實は家内が割烹着が欲しいといふので私が十圓以上もするのを作つて貰つてやつたら、十圓もお

金をお出しになる位なら、着物を買つて下さればいいのにつて叱られたんです」

さうだらう、その時は物價の安い時で割烹着などは一圓以内で買へたのだから。

「この間懐ろ工合がよかつたのでそろ／＼運が向いて來たぞと喜んでゐたら新調の靴を盗まれました。どうも金といふものは右から入れば左に抜けるやうに出來てゐるんですねえ、アハハハ」と云つて笑つてをられた。

又看護婦さんの話に逆戻りする。

「先生は此の間風呂屋にいらつしやいましたの。入口に「本日休業」の札が貼つてあるのをお氣付きにならないでお入りになつたんださうです。ところが誰も居ないので正月だから客が來ないのでな、と思つて、着物を脱いで浴場に入つたんださうです。さうしたら風呂に蓋がしてあるので蓋を取つたら中が空つぽだつたさうです。先生は變だなあと思つてぶる／＼寒さに慄えながら、風呂屋の人に訊いたんですつて。風呂屋の人は裸になつてゐる先生を見てびっくりして、へえ、今日は休業ですが、と言つたので、なあんだお休みか、と着物を着てこそ／＼歸つて來られたのださうです」と言つて看護婦さんは笑つてゐた。

或る年の正月、中村さんが私の家へ遊びに來られた。

「今年から頑張りますよ」

と威勢のいいことを言つてをられた。そして、私に洋服の上衣を示されて、

「これを買ひました」

と云はれた。

「何時ですか」

「この間です」

「お正月になつてからですか」

「さうです」

「景氣がいいですねえ」

と言つたら、

「いや、據ろなく買ったんです」

と言はれた。

「どうしてですか」

ときいたら、

「實は此の間、よその家に行つて歌留多<sup>かると</sup>をして遊んだんです。部屋の中が暖かだったので上衣を脱いで後ろの臺の上に置いたんです。ところが臺と思つたのは火鉢だったので。火鉢の上に上衣を丁寧に載つけて置いていたんだから堪りませんや。背中の中が燃えて大きな穴が開きましてねえ、驚ろきましたよ。酒の酔ひが覺めてしまひました。」

「焼け肥りといつて縁起がいゝちやありませんか」

「いや、正月早々柳原に行つて來ましたよ」

「でも似合ひますねえ、柳原の安物とは見えませんよ」

「それならいゝけれど」

と云つて中村さんは安心したやうな顔をしてをられた。

昨年のお正月だと思ふが、中村さんが御年始に來られた。

「今年から頑張りますよ」

と又例年のやうに威勢のいゝことを言つてをられた。歸られる時、中村さんの帽子を捜がしたが見當らない。

「帽子を被ぶつて來たんですか？」

ときいたら、

「ええ、ターちゃんの被ぶつて來ました」

と言はれた。ターチャンといふのは中村さんの坊ちゃんの名である。まだ七つか八つの可愛いお子さんである。中村さんは人一倍の子煩悩である。坊ちゃんの帽子を被つて歩くと坊ちゃんと一緒に御年始廻りをしてゐるやうな氣がするのであらう。私は何だか目頭<sup>めがしら</sup>が熱くなるやうな氣がした。

(中村さんは匿名)

## 見 學

私は先日故あつて母校へ卒業證明書を請求したところ、單に返信料を送つたゞけなのに立派な用紙に本文は勿論、私の姓名から生年月日まで鮮やかなタイプライターで書いて送つてくれたのには恐縮した。用紙の上欄に、大きな活字で大日本帝國政府と横に記入してあるのが注目を惹いた。これまで卒業證明書を見たことのない私には、これが普通なのかも知れないが、一卒業生に對してこゝも丁寧に作成してくれる學校當局の好意が嬉しく感ぜられた。卒業した學校を母校といふが、な

るほど母の懷ろに抱かれてゐるやうな氣がした。私は視力があるから斯うした學校の心遣ひが分るのであるが、盲人であつたらこれほど心に泌みないであらう。

學校を卒業して長年経つと、學課のことなどは綺麗に忘れてしまひ、記憶に残るのは先生や學友のことなどである。先生は學問や技術よりもその人格が印象に残る。

私が上級生の頃、官城縣女子師範學校長から教頭に御就任された秋葉馬治先生（後に校長になられた）は非常に嚴格なお方であられたが、どういふものか未だに懐かしくてならない。會て先生が某校から他校に御轉任になられた時、學校で留任運動が起つたといふ美談がある。有名な小野訓導―白石川で溺れる教へ子を救はふとして一身の危険を忘れて河中に飛込み、悲壯な殉職を遂げたあの小野さつき女史は實に先生の御薫陶を受けた一人であるといふ。先生は正直な御方であられた。先生が御洋行される時私達に向つて「私は高等學校や大學に入りたかつたが家庭の事情が許さないので師範學校に入り、其處を出てから小學校の教員をし、それから東京高等師範に入つたのである。それで今度洋行するにも資格は専門學校卒業といふことになつてゐる」と率直に申された。女學校長や師範學校長の要職を歴任されながら少しも邊幅を飾らぬ先生の御態度を私は男らしいと思

つた。仄聞するに先生の御夫人は非常な賢婦人であらせられるといふ。先生が如何に嚴格な御方であられるかは、教頭に御就任せられてから僅か十ヶ月を出でない間に、生徒で退校處分を受けた者が私の記憶だけでも四、五名を算へるのを見ても分るのである。一體盲學校では此處を放校されると、他の學校と違ひ何處にも行く處がないから可哀相だといふので、生徒に對しては可なり寛大な態度を取つてゐた。ところが先生は、盲學校だからといつて何も他の學校と差別する理由が無い、盲人は單に視覚を缺いてゐるだけで他は普通人と同様である、飽くまで健全な人物を作らなければならぬ、害虫はこれを取除かなければ花が侵蝕されてしまふ、大勢の生徒のためには犠牲も已むを得ない、といふのが御趣旨であられた。

又、從來、學校の先生は、生徒に對して「誰々さん」と、さん呼びをしてゐた。これは女生徒に對してばかりでなく、男生徒に對しても用ゐられてゐた。先生はこんななまぬるいことでは駄目だと仰せられて、生徒を他校のやうに一切呼びつけにされた。出席簿をつけられる時も勿論呼びつけである。

それから寄宿舎と學校は廊下傳ひになつてゐるので、授業の合間々々の休憩時間に寄宿生は寄宿に歸る習慣があつた。これも先生は嚴禁された。又寄宿舎では年中行事として新入生の歡迎會や卒



業生の送別會、或ひは談話會などの催しがある。これまでは、寄宿舎で會が開かれても、學校の先  
生方で臨席されるといふことは殆んど無かつた。それを秋葉先生は、全校生徒の過半數が寄宿生活  
をしてゐるのである、その多數の生徒の會合に學校の先生が一人も出席しないといふ法があるか、  
先生は出来るだけ生徒に接近する機會を作らなければならぬ、と仰せられて、それからは全職員が  
寄宿舎の會に出席されるやうになり、寄宿生と共に茶菓を喫して一夜を楽しむといふ風になつた。  
斯うして先生は御就任早々、快刀亂麻を斷つ如く多年の宿弊を一掃されたのである。生徒は先生に  
滿幅の信頼を捧げてゐた。

先生が官命を帯びて御洋行されると聞いた時私たちは一時でも先生にお別れするのが何だか大黒  
柱を失ふやうで心細くてならなかつた。それで蟲のいゝ話だが吾々が卒業してから御洋行して貰ひ  
たいものだと言つてゐた。

私は先生の海外御滞在中、時々御手紙を頂戴した。米國から獨逸に渡られ、ベルリンに御到着に  
なられた當夜、長文の御手紙を生徒である私に寄せられた。これには私も感激した。恐らく當時生  
徒で先生から御手紙を頂いたのは私位のものであらう。先生は私が學校を卒業した年に、二年振り  
で御歸朝あらせられたが、お歸り早々私の勤めてゐる病院へわざわざお訪ね下さつた。「野地、達

者か」といつて私の手を握られた。柔道二段といふのに柔かい御手だなあと思つた。お歸りになら  
れる時、私を外にお連れになつて氷水を御馳走して下さつたことを覚えてゐる。先生の氣高い御人  
格は生涯忘れ得ないであらう。

私達のクラスに今井龜吉といふ生徒が居た。この今井さんは、秋葉先生によく叱られたものであ  
る。學科の成績はいゝのだが始終遅刻して来るからだ。先生に「だらしのない奴だ」と叱責される  
と「電車に故障が起りました」と初めの中は辯解してゐたが、さう度々故障を口實にしても居られ  
ないので、教室に這入つて黙つてゐると、「今井、また遅れて来たな、仕様のない奴だ」とお叱り  
になられる。今井さんは神妙にしてゐた。今井さんは視力も可なりあり、色白の優しい顔立をして  
ゐた。確か埼玉縣の盲學校を卒業してこちらに來られたやうに記憶してゐる。

今井さんがよく遅刻する譯は後になつて判つた。苦學をしてゐたださうである。今井さんは或  
る按摩さんの家に同居して、其處から通學してゐたださうだ。學校から歸つて來ると、夜はおそ  
くまで按摩をして働いてゐたのである。達者な人でも無理なのにあまり身體の丈夫でない今井さ  
んには負擔が重過ぎた。過勞と睡眠不足が積り積つて極度に衰弱した今井さんは遂に胸を患らひ、

大分病氣が重くなつてから施療病院に入院したが其處でとう／＼亡くなられたのであつた。

大人しい親切な今井さんが死んだと聞いた時、クラスの人達は「へーえ」と氣抜けがしたやうな顔をしてゐた。

「龜さんがね……」

吾々は平素今井さんのことを龜さん／＼と言つてゐた。

「俺が見舞ひに行つた時、經節を削づるやうな咳をしてゐたぜ」

と一人の盲生徒が言つた。

クラスでは追悼會を開くことになつた。私たちの同級生に大へんお經の上手な盲生徒が居た。何んでも本式に習つたらしい。私達は「僧正」といふ綽名をつけて呼んでゐた。この僧正が追悼會の日に頭をつる／＼坊主にして、何處で手に入れたか墨染の衣を着て、今井さんの靈前でおこそかにお經を上げた。

「巧いもんだなあ」

と後ろで呬やく聲がした。

「龜さんも極樂へ行つたらう」

と誰かが言つた。

——月日は水と流れて私達も愈々卒業を目前に控へて心が落ち付かなかつた。卒業の年には各所を見學することになつてゐる。私達も大學病院、盲學校、少年審判所其他方々を觀て歩いた。盲人が見學や遠足をして何處が面白いといふ人もあるかも知れないが、變つた場所で變つた事物に接すれば盲人とても感興を起すのに不思議はない。日光の名所に啼き龍といふ室があつて、其處で拍手を打つと天井で異様な音を發する。龍が啼くのだといふ。勿論室の裝備がさういふ音響を發するやうに出來てゐることは分つてゐるが、これなどは盲人にとつて興味深いものである。華嚴ノ瀧のあの凄まじい瀑音をきいて天然の偉大に心を打たれ、中禪寺湖畔の宿屋に泊つては、湖で獲れたといふ鱒のフライに舌鼓を打つなど、見學、旅行は盲人にも新たな感觸を與へ、愉快なものである。私の古い日記帳に一葉の紅葉が貼つてある。色は褪せてゐるが形は十數年前のその儘である。これは日光に遠足をした時、中禪寺湖から華嚴ノ瀧に向つて流れる小川の中に、浮きつ沈みつしてゐるのを、眼の見える一女生徒が、あまりに美しいので手で掬つて私に呉れたのである。この紅葉を下さつた女生徒は、人の話では卒業後自殺したといふことであるが何にしても思ひ出深い記念である。水戸へ行つた時、お琴の先生で小澤さんといふ女の盲人が居られた。私たちの學校の古い卒業生だ

さうである。小澤さんは私達が遠足に來たことを知つて大へん喜ばれ、その夜態々宿屋までお訪ね下さつた。そして生徒一同に名物の菓子を下さつた。誰でも母校は懐かしいであらうが、殊に盲人は境遇が淋しいので母校の遠足と聞いたゞけで心の古里に歸つたやうな氣持ちがするのであらう。

——話は少しよそ道に外れたが、私達は一月であつたか二月であつたか何でも雪解けの日に築地の私立盲學校を參觀に行つたことがある。學校の廊下を歩くと床板がぎい／＼鳴つて如何にも震災後の急造建築といふ感じがした。外から寒い風がひゆう／＼吹き込んで來た。生徒は中年で失明した人が多いやうに思はれた。服装も袂の着物を着た人が大分居た。私達は案内されて各教室を一巡したが何處の盲學校にも一抹の哀愁が漂つてゐると思つた。

ふと私は標本棚に眼を留めた。そして何氣なく眼の前に飾つてある一個の硝子瓶を取り上げて見た。灰色の臟腑がアルコール漬になつてゐる、何だらうと思つて瓶に貼つてあるレッテルを見た時、私は思はずアツと驚きの聲を發した。急に眼の前が暗くなつたやうな氣がした。レッテルには故今井龜吉の腎臟と書いてあつた。今井さんは治療病院で死んでから解剖に附され、その臟器はアルコール漬となつて標本棚に晒されてゐるのだ。あの濃厚な人のいゝ今井さんが——私はクラスの

人達に呼びかけた「おい、これは今井さんの腎臟だぜ、標本になつてゐるんだ」

すると皆は驚いて私の周圍に集つて來た。「どれ見せろ」「俺にもさわらせてくれ」と冷たい硝子棚を代る／＼抱いて「この中に龜さんの臟腑が……」といつて暗然とした。

「解剖されたのかなあ」

「俺はちつとも知らなかつた」

——弱々しい陽が西に傾いた頃、私達は護國寺前で電車を降りると雪解けの道を歩きながら寄宿舎に歸つた。そして温かな風呂にふか／＼と浸りながら今日の感懐に耽つた。

「あそこで龜さんに會ふとは思はなかつた」

「全く意外だつた、龜さんも俺達に會つて喜こんだらうなあ」

「卒業の前に皆で會つて來たのも何かの因縁だらうなあ」

その翌日も翌日も龜さんの話が出た。盲生徒達には冷たい硝子瓶の感觸が何か龜さんの魂でもあるかのやうに感ぜられたのであらう。

## 盲兒の感情

私が寄宿舎に入つてから三、四年経つて、中舎を改築することになり、私達は一時學校に移るこ  
 とになつた。中舎といふのは寄宿の中央にある一棟で、室は三つあつた。一室に八名として三室で  
 二十四人居る譯だが、その中で視力があつて東京に實家のある者は通學させ、大きな生徒は他室、  
 即ち北舎に移し、初等部の生徒だけ集めて學校の二階の按摩室に收容することになつたのである。  
 その時、私が監督役を仰せつけられて皆の面倒を見ることになつた。何人位居たかはつきりしたこ  
 とは覚えてゐないが、十三人位だつたと思ふのである。按摩室の廣さは二十四、五疊敷位で、南向  
 きの日當りのいゝ室であつた。今の校長室がそれである。食事の時や、朝、洗面の時には、寄宿ま  
 で行かなければならないので一寸臆劫であるが、それ以外は、何だか寄宿から解放されたやうな氣  
 がして、のんびりしてよかつた。按摩室には押入が無いので朝起きると夜具蒲團をきちんと疊んで  
 置くやうに言ひ付けておいた。又机の上も整理して何時參觀人が來ても見苦しくないやうに氣を付  
 けてゐた。或る日、突然舎監が校長先生と御一緒に此の假宿舍に入つて來られた。そして室内を御

覽になられて、

「うむ、整然としてゐる。誰が觀に來ても恥かしくない」

と満足さうに仰言つてお歸りになられた。以前は點檢後、室の窓から飛び出して焼芋や饅頭を買  
 ひに行つた私ではあるが、斯う舎監や校長から信頼されると無茶なことが出來なくなる。尤もその  
 頃は、前非を悔いた譯でもないが、以前のやうな馬鹿氣な眞似はしなくなつてゐたのである。だか  
 ら、その時の行爲だけで人を云々することは出來ないと思ふ。一體室長には師範部生のやうな上級  
 生がなるのが普通である。當時、私は師範部生でもなく、一介の平生徒に過ぎなかつたので、他に  
 室長になる人はいくらでも居たのである。それを舎監の眼が届かない假宿舍の監督に私を任命され  
 たのであるから、私も責任の重大を痛感せずには居られなかつた。

室員がいづれも初等部の生徒なので悪い習慣を付けてはならないと心配した。で私は、朝は起床  
 の鐘が鳴る前に必らず起きてゐて、鐘が鳴ると同時に皆を起して、夜具蒲團を疊むお手傳ひをし  
 り、身のまわりの世話をしてやつた。それから洗面所に連れて行く。食堂にも一緒に行く。自習時  
 間中は雑談を禁じて學習に専念させる。學校の授業が始まると、皆を室から出して下アに鍵をかけ  
 る。不在中に紛失物があつてはならないからだ。放課後皆が歸つて來ると何が食ひたいかをたづね

て菓子や焼芋を買つて来てやる。床屋にも連れてゆく。夜は夜具蒲團を敷いてやる。盲兒はよく横つちよに蒲團を敷くからだ。一番辛かつたのは夜中に便所に起されることだ。丁度寒中だったので寝巻の儘では行かれない。襦袢じゆばんを引つけて行く。室から便所は遠かつた。人氣のない夜の學校はがらんとして化物屋敷のやうだ。長い廊下は眞暗で足音ばかり無氣味にひびいて何だか後ろから襲はれるやうな氣がする。初等部の生徒が怖がるのも無理はない。

私は寄宿舎の監督を勤めた経験から、責任のある立場に置かれることは、實によいことだと思つた。これを相撲で譬へるなら、力士が大關になると、大關としての體面を保つために一層稽古を勵むやうになつて自然と貫祿が付いてくる。又行司の式守伊之助が木村庄之助を襲名すると、行司の權威を保つために、一舉一動にも氣を付けるので自然と氣品が備はつて来る。みな責任感から来るのだ。

或る朝、私がいつものやうに皆の蒲團を疊んでやらうとしたら、一人の盲生徒が珍らしく自分で疊んで室の隅つこに置いたのでおかしいなあと思つた。それは私にも経験があるからだ。私は子供の時によく寝小便をしたものである。夜中に寝小便したのは、尻つべたで乾かしてしまふが、夜明け頃のは乾かない。さういふ時には早く起きて自分で蒲團を疊んで押入の中に藏つてしまふ。一

度こういふことがあつた。十歳の頃である。或る冬の晩、母が何時ものやうに子供たちの寝巻を炬燵に掛けて下さつた。こうして置くと、寝る時に寝巻が温たかだからである。ところが、誰であつたか炬燵にあたらうとして蒲團を捲つたら中から湯氣が立つてゐるので、

「母さん、炬燵から煙が出ますよ」

と大聲で叫んだ。

「え」

と母はびつくりして蒲團を剝いだ。寝巻に火でも點いたと思はれたらしい。私はゆふべ寝小便したことも忘れてゐたので、

「母さん、誰の寝巻が燃えたの」

ときいた。

母は寝巻を一枚々々めくつてゐたが、

「繁ちゃん」

と私の名を呼ばれた。見ると私の寝巻から湯氣がぼう／＼立つてゐるのである。仕舞つた！と思つたがもう遅い。

「繁ちゃんが寝小便をしたんだ、臭い〜」

と皆が大して臭くもないのにわい／＼騒ぎ立てた。全く寝小便には苦勞をしたものである。

——それで、盲生徒が自分で逸早く蒲團を疊んだのを見て、寝小便だな、と直感した。人間は自分の経験で人の善惡を判断するらしい。

盲生徒は果して寝小便をしたのであつた。私はその盲兒を室の外に連れ出して訊いた。

「今日は早く起きたねえ」

「は」

盲生徒は誰も居ない所に連れて来て妙なことをきくといふやうな顔をしてゐた。

「ゆふべ寝る前にお湯を飲まなかつた？」

「飲みません」

「寝る前に便所に行つたかね」

「行きました」

と言つてはつと氣が付いたらしく顔を赫らめた。

「僕も子供の時分にはよく寝小便をしたものだ。お正月の元日にしてね、蒲團を乾かすのに苦勞を

したものだ、君のやうな子供の時分には誰でもするんだ。ちつとも恥かしくないんだからな」

と言つたら盲生徒は涙をこぼして俯向いた。出来るだけ刺戟しないやうに穩やかに言つた積りだが、子供の心には強くひびいたかなと思つた。

「僕は誰にも言はないから心配するな」

と慰めるやうに言つたら、盲生徒は袖で涙をそつと拭いて、

「ごめんなさい、もうしませんから……誰にも言はないで下さ」

と哀願するやうに言つた。

「うん」

と私は強く頷づいて盲生徒の身體を凝つと見詰めたが此の子は榮養といひ、體質といひ、何處か他の子供より劣つてゐるところがあると思つた。冷え性ではないかとも思つた。

盲生徒はやつと安心したやうな顔をして、

「僕は日曜日でも家に歸らないでせう。それはねえ、僕、小さい時から寝小便をすると、お父さんにうんと叱られるので、また歸つて寝小便をした時のことを考へると怖くて歸れないのです。お父さんは僕を一番憎んでゐます」

と反抗的な語氣で言つた。

盲児は兎角神経質になりやすいものだと思つた。甘やかすのもよくないが、頭ごなしの嚴格も性質をいぢけさせてよくないと思つた。盲人教育の中で一番難かしいのは育兒の躰け方ではないかと思ふ。盲児の初等教育の任に當つてをられる先生の苦勞は容易でないと思ふ。而もその仕事は地味で縁の下の力持ちである。私は初等部の先生の勞苦が今少し社會から酬ゐられてもいいと思つた。

### 日本盲生徒の三特技

在學の頃、運動場に相撲の土俵場があつた。これなどは我が國の盲學校獨特のもので、恐らく歐米の盲學校に土俵なんか無いだらうと思ふ。西洋の盲人で日本の盲人の眞似の出来ないものは、蕎麥の食ひ方と算盤の彈ちき方とそれから相撲の三つだらう。

私も盲學校に入つて初めて盲生徒が蕎麥を食つてのを見たのであるが、どうして巧いものだ。器用な盲人は、もりでもざるそばでも箸で蕎麥を掬つて垂たれの入つてゐる茶碗の中に入れ、それをぐつと上に持ち上げて口の中につる／＼と持つて行く。お膳の上に落としたり、垂をこぼしたりなん

かしない。先づ感心するのは箸の持ち方だ。箸の先に力を入れてない。力を入れないから箸で挟んでる蕎麥の重味が分る。重味が分れば垂に浸す蕎麥の分量が分る。

「一々、タレに浸けて食ふのは面倒だらうから、井の中にもりを入れてその上にタレをかけて食つたらどうだ」

と言つたら、

「いや、それでは旨くない。もりといふものは、少しづつ箸で掬つてタレに浸けて食ふところに旨味があるのだ」

と通つうを振り廻す。

「それもさうだな、だが厄介ぢやないか」

ときいたら、

「何んでもない。こうして箸でつまんでタレに浸けて食ふのが楽しみなんだ」といふ。

私は書道や畫のことは知らないが、畫家や書家が筆の先に力を入れる工合は、盲人がもりそばを食ふ時に、勘で箸を持つ呼吸と同じではないかと思ふのである。こんな藝當は西洋の盲人にはとて

も真似が出来ないだらう。だが盲人は飯を食ふよりも、もりそばを食ふ方が食ひ易いのではないかと思ふ。なぜといふに、もりそばを器用に食ふ盲人も、飯を食ふ時には茶碗の縁に口を附けて、箸で掻き込むやうにして食ふからだ。おかずを食ふ時も物によつては皿の縁に口をあて、食ふ。箸で飯を挟んで食ふのは蕎麥を挟むより難かしいらしい。また、蕎麥ならば口を大きく開けなくても、吸ひ込むやうにして食へばいゝのだが、飯は箸でつまんだ分量によつて口の開け方を加減しなければならぬ。盲人が眼開きのやうに飯を食ふ時、茶碗に口を當てないで箸専門で食つたら大したものだが、もりそばを眼開きのやうに上手に食ふだけでも西洋の盲人より斷然手先が器用だといふことが出来やう。

日本の盲生徒は算盤で算術をやる。實に巧いものだ。代數でも初歩のものなら算盤でやる。盲人には盲人用の算盤がある。別に眼開きのと大して相違がないのだが、眼開きのは球を用ゐてゐるのに對し、盲人のは板を用ゐてゐるのだ。球だとつる／＼して知らぬ間に上下に亙つてしまふおそれがあるから球と同じ位の大きさの板を用ゐ、その板の真ん中に棒を通して置き、眼開きが球を弾ちくのを、盲人のは板を上にくるるのである。この盲人用算盤を發明したのは、元東京盲學校の教頭

をされ、後に京都府立盲學校長になられた、故岸高丈夫先生である。先生の御功績は千古不朽である。往年、先生が渡米された時、この算盤を米國の盲生徒に紹介され、懇切に説明されたが、どうしても要領が會得されなかつたといふことである。「二二天作の五」はやはり日本獨特のものらしい。手の器用なところへ持つて来て、この算盤といふ武器を持つてゐる日本の盲生徒は幸福である。

さて今度は日本の國技相撲だが、この相撲に對する興味も、ラチオ放送によつて一層油を注がれた観がある。若しラチオの實況放送が無かつたら、斯うまで盲生徒間に相撲熱が昂まらないであらう。ラチオの前には、眼開きも盲人も差別が無い。

一體盲人は勝負事とか武張つたことが好きだ。これには色々な理由もあらうが、職業なども多少の関係があるらしい。私が寄宿舎に居た頃、一時將棋が非常に流行したことがある。將棋の駒に點字で金とか銀とか書いてあるのだ。當時の副舎監は吉野賢助先生で將棋が強く、三段とか四段とかいつてゐた。先生は金澤の四高を経て東大の文科に學ばれたのであるが、御病氣のため中途退學されて盲學校に職を奉ぜられたのである。實に温厚な先生であつた。盲生徒たちはこの先生の御指導



もあり、それに根が凝り性なので、夜中でも眞暗な室でバチリ／＼と技を闘はしてゐたものだ。中には實力初段といふ盲生徒も居た。

相撲は大概腕相撲や座り相撲が行はれた。按摩やマツサージをやつてゐる者は腕つぶしが強い。音楽生も琴を弾いてゐるので指の力が強い。それで指相撲といつて、拇指の腹と腹を合せて押しくらをやる。按摩はマツサージと違つて主として親指を使ふので拇指の力は相當なものだが、それでも音楽生の強いのかゝると負けることがある。座り相撲は腕相撲と違つて中々勝負がつかないもので、仕舞ひに盲生徒たちは室に居る自分の位置が分らなくなつて、障子や机に頭を打つつけたりする。

私は相撲ほど、盲人の運動法として理想的なものはないと思ふ。今日、兒童に適した相撲法が研究され、所謂兒童相撲なるものが盛んに行はれてゐるが、盲人にも盲人向きの相撲法を研究して普及したらどうかと思ふ。相撲に正しい理解を持つには専門の力士を招聘して指導を仰ぐのが一番いいと思ふ。お相撲さんが學校に來たらさぞ人氣の湧くことであらう。

昔は盲人に相撲を取らせて興行をしたさうである。事の起りは女相撲から始まる。女相撲の歴史は随分古い。雄略天皇の御代からだといふ。江戸時代に女同志の相撲より男の盲人と取らせたらさ

ぞ面白からうといふので、片や女、片や盲男で大いに觀客の人氣を煽つたさうだ。これが盲人で相撲の興行に現はれた最初で、即ち明和六年に江戸は淺草寺の境内で、大阪は難波の新地で行はれたのがそれだ。文政九年の三月に、上野山下で興行された女と盲男の相撲は素晴らしい人氣を呼んださうだ。名前も盲男の方は、杖ヶ嶽とか杖の音、さぐり手、揉みおろし、など面白い名を付け、女の方も美人草とか玉の越、など洒落れた名前を付けて取つ組んだのださうだ。尤も女で相撲を取る位だから普通の女でないことは明らかで、大概是醜業婦上がりださうだ。後に女と盲男の相撲は風紀上宜しくないといふのでその筋から興行禁止を命じられたさうである。(田中香涯氏の「女角力」に據る)

相撲も眞剣に取らないと觀てゐても面白くない。それには運動會の時の對抗相撲が面白い。

盲人の相撲の取り方は斯うだ。本式にやる譯では無いから、力水もつけなければ、鹽も撒かない。先づ行司が双方の力士に握手をさせる。右の手で握手をするのだ。これが仕切りである。そして、行司の掛け聲一つで握手してゐる手をバツと離して取つ組むのである。だから制限時間も何も無い。行司の聲を耳を澄まして聽いてゐるのだ。中腰の姿勢で待機してゐるのである。盲生徒も四つに組むと中々強い。

その勝負も土俵の中で倒れるか、土俵を割つた時に決まるのであるが、盲生徒は俵の上に足を載せて、初めて土俵際といふことが分るのでから、足を大きく土俵外に踏み出さなければ負としない。徳俵の上に足を載せても差支へないのである。そこは寛大だ。

私が在學の頃、私より一級上に石川さんといふ半盲生が居た。寄宿舍では私と同室だつたこともある。半盲生と云つても盲學校には惜しい位の視力である。九州の人だけに覇氣がありきび／＼してゐた。この石川さんは實に相撲が強かつた。その相撲の取り口も派手で、四つに組んでゐる相手の身體をぐつと引き付けると同時に、右足を飛ばして相手の左内股に當て、バツと體を左斜めに捻つて投げを打つのであるが、これが實に鮮やかで相手の身體は宙に半圓を描いて投げ飛ばされるのである。石川さんは餘程この技が得意と見えて、一度この業を仕掛けたら大概の者は叩きつけられたものである。私はこれを見て四つ相撲は相手の體を引き付けるのが難かしいところだと思つた。

當時、石川さんの他に今一人相撲の上手な人が居た。野本さんといふ半盲生で、この人は突つ張りを得意としてゐた。或る年の運動會に野本さんが一方の大將となつて出場したことがある。相手は二十貫もある堂々たる體軀の盲生徒なので、どんな相撲を取るだらうと、興味をもつて觀てゐると、行司の掛け聲と同時に野本さんは、パン／＼と突つ張りの速射砲を浴びせたので、組んだら俺

のものだといふやうな顔をしてゐた盲生徒も手の下しやうがなく、タチ／＼と他愛もなく土俵を割つてしまひ、何だか拍子抜けしたやうな様子であつた。その頃はまだラチオも無かつたし、本物の相撲は子供の時に一度見た切りで、相撲に突つ張りの手のあるのを知らなかつたので、なるほどああいふ飛道具を使はれては手の施し様もあるまいと感心して見てゐた。これは盲生徒にとつて確かに苦手だらう。

盲生徒が相撲を取つても愉快だし、又ラチオで聽いても面白いといふのも、やはり國民性とでもいふのだらう。西洋の盲人には此の醍醐味は分るまい。

## 盲人雜感

### 一、河 童

在學中は同級生とも上級生とも親しく交際してゐたが、どちらかといへば下級生と多く付き合つてゐた。それで寄宿舍に居ても舎監は、私の性質を御存じになつてをられたのかどうかは知らない

が、私の室には他室よりも初等部の生徒が多勢居た。今、宮城先生の代稽古をしてゐる長野武君も私が室長の時に入室したのである。武ちやんなどは野放しにして置いても獨りで育つてゆく程懶々な子であつたが、中には夜具蒲團もたゞめない者も居た。夜は蒲團を敷いてやり、朝はたゞんで押入に入れてやる。これもまあいゝとして、中には便所に行つて尻の拭き方も知らない者もあつて一々尻拭ひをさせられたのには閉口した。自習時間などに頼まれるのはそれ程にも思はないが、夜中に眠つてゐる所を起されて便所のお供をさせられるのには弱つた。寄宿に風呂が立つと、手を曳いて連れてゆき、身體をすつかり洗つてやる。朝、顔を洗ふ時には着物の袖口が濡れないやうに注意してやる。襦袢の襟やカラーに垢が附いた時には取換えてやらねばならぬ。幼稚園の子供の面倒も大變だらうが、盲兒の世話も中々容易なものではない。

武ちやんが私の室に入つた時はまだ十二三の子供であつた。恰度、室が満員だつたので、舎監は押入が無いから駄目だ、一室に九人收容した例がない(定員八名である)と最初は言下に斷はられたのであるが、そこをうまく頼んで入れて貰つたのである。寄宿舎に入る時には宮城氏の奥様がわざ／＼武ちやんを連れて來られた。當時武ちやんはズングリ肥つた色の黒い子で學校ではよく喧嘩をして、泣いたり泣かせたりして室に歸つて來たものだ。或る時學校から大聲を擧げて泣きながら

室に歸つて來た。こんなにわあ／＼泣きながら室に戻つて來る子は他に居ない。私が泣く理由をきいたら、膝つ小僧だか向ふ脛だかを何かに打つつけて來たのだといふ。どれ見せろ、といつて武ちやんの足をしらべて見たが、どこもどうもなつてゐない。血も出てゐないよ、といつたら「血が出てなくても痛いんだあ」といつて又顔中を口にして泣いてゐた。その頃武ちやんには一つの癖があつた。といふのは武ちやんは眼が凹んでゐるので、いつもその眼の凹みに指を突つ込んでゐるのである。私はよく注意してやつたものである。それに武ちやんは大食らひで、身體が動けなくなるほど飯を食つて、あとは晝寝をするのである。

夏休みに私は武ちやんを連れて沼津の海岸で二ヶ月暮したことがある。下宿屋では最初、私は月二十五圓、武ちやんは子供だから二十圓でいゝといつてゐた。それが三日と経たない中に宿屋の主人が、とてもやり切れないといつて武ちやんの下宿料を大人分にしてしまつた。その頃は肥つてゐても丈が低く、私の腋の下に頭が入る位の高さだつた。日中は海岸に連れて行つて遊んだ。武ちやんは猿股を持つてゐないので、いくら子供でも丸裸では、と思つて私のを貸してやつたら武ちやんは喜こんで私のダブ／＼の猿股を穿いて海の中に飛び込んだ。最初海岸に連れて行つた時には浪の音が怖いといつてどうしても海の中に入らなかつた。初めて波を頭から被つた時、武ちやんは鼻か

ら口から潮水を飲んで泣き出した。私が海には河童かっぱが居るといつたら、武ちやんは宿屋の主人夫婦や、泊つてゐるお客に根掘り葉掘り河童のことをきいてゐた。

或る晩、大へん風が強くて夜通し窓の硝子戸がガタ／＼音を立てゝゐた。翌る朝起きて見たら戸の隙間といふ隙間に新聞紙が詰め込んであつた。私が武ちやんにどうしてこんなことをしたんだ、ときいたら、河童が来るといけないからだ、と眞面目な顔をして答えたので私も思はず噴き出してしまつた。

武ちやんは晝はごろ／＼してゐて、夜人が寝鎮まつた頃になると、寢床の中に腹ん匍ひになりながら、しきりに算盤を弾ちいて算術を勉強してゐた。それが毎晩である。算術がよつほど好きらしい。初等部三年生の時、既に中等部でやる代數を勉強してゐた。

武ちやんが初等部の生徒の時の受持の先生は密本先生であつた。先生は武ちやんを三年の一學期から一躍四年に進級させて下さつた。これを見ても武ちやんが如何に頭のいゝ子であるかゞ分るのである。

或る日、武ちやんは私に玩具おもちゃの汽車が欲しいといつた。それで日本橋の三越に連れて行つて汽車を買つて來た。武ちやんはレールを組合せて大きな輪を作り、その上に幾臺かの客車を繋いだ機關

車を走らせて喜んでゐた。そしてレールに坂を作るんだといつてレールの下に本を敷いて高くし、その上を汽車が威勢よく走ると、この機關車はとても力がある、凄いと、凄いといつて感心してゐた、實に無邪氣なものであつた。

## 二、盲人の足

恰度その頃、どこの基督教會であつたか忘れたが、その教會で盲目の子供のために點字の雑誌を發行してゐた。何でも「小鳥の歌」とかいふ名前の雑誌であつた。その雑誌を編輯してゐる村上さんといふ盲人が、ふとした機會から私の室に出入りするやうになつた。村上さんは若いのに似合はず子供が好きで、時々私の所へ盲兒に上げてくれといつて「小鳥の歌」を置いて行つた。いつも夜分になつてから、それも蒲團を敷いて寝かけた頃にひよつこりやつて來るので弱つた。村上さんの聲はまるで穴倉から出て來たやうな陰氣な聲であつた。この村上さんは時々杖を忘れて歸るのさうである。盲人が外を歩くのに杖を忘れて歸るなど一寸面白いと思ふ。

世間では盲人のことを勘がいゝとか悪いとかいふが、この勘の良否は大概、歩き振りを見て云ふのではなからうか。生れつきの盲人は中途失明者より概して勘がいゝやうである。藝事は小さい中

から學んだ方が上達が早いさうであるが、盲人としての歩き方も小さい時から練習した方が上手になるのかも知れない。勘のいい盲人の歩き方を見てみると、地上に横はつてゐる障害物に出會つても衝突的に當らないやうに膝の關節と足のひらで巧みに調節を取つてゐる。だが生れつきの盲人が如何に晴眼者のやうに大腿で歩いて、その歩き振りは晴眼者と自ら異なるものがある。歐羅巴に在留してゐる日本人が如何に西洋人のやうな歩き方をしてゐても、すぐ日本人だといふことが後姿を見たゞけで分るさうである。身長も高く、足もすなりとしてゐたら後姿だけでは分りさうもないやうに思ふが、やはり歩き方に西洋人と違ふところがあるらしい。又、日本人でも西洋人に顔が似てゐて、そして西洋人にも劣らぬ色の白い人が居る。然し遠く離れてゐても、日本人であることが直ぐ分るさうである。色の白さがどこか違ふらしい。

先天性の盲人の歩き方が、晴眼者と違ふところは、どんなに大腿で歩いてゐても足のひらを地面に着ける瞬間に、一寸無意識に足の力を抜く傾向がある。この動作をするのに一瞬ではあるが時間を要し、又その刹那に膝が少し彎曲する。こゝが晴眼者と違ふ所なのである。端的に言ふならば、盲人は足のひらよりも膝に力を入れて歩くのだ。膝から下はいつでも力が抜けるやうにしてゐる。これは柔道を知つてゐる人が勘のいい盲人に足拂ひをかけて見ると直ぐ分ることである。下手な足

拂ひ位では倒れない。ふわり／＼と足の力を抜いて足を外づしてしまふ。中途失敗者はそこへゆく／＼と身體のこなしが固い。併し、人によつては生れつきといふか、身體の動作が輕快で先天性の盲人と少しも變らない人がある。

私が盲學校に居た頃、大場さんといふ盲生徒が居た、大場さんは途中で失明されて盲學校に入られたのであるがこの人の動作は實にしなやかであつた。尤も大場さんは舞踊家石井小浪さんの實弟だから或ひは天稟なのかも知れない。

### 三、盲人の眼鏡

次に眼鏡の話だが、盲人の中に素通しの眼鏡をかけてゐる者がある。眼球に異状のない盲人が素通しの眼鏡をかけてゐると晴眼者と間違へられるが、然しそれは一寸の間で、すぐ眼付きで盲人であることが分る。眼球を摘出した盲人や或ひは眼球が生れつき小さくて兩眼を閉ぢてゐる盲人で素通しの眼鏡をかけてゐる人がある。これはその人の好みからきたのであつて、別に晴眼者を装ふとか、見榮のためとか、そんな氣持は親しく付き合つてゐる者には少しも認められないのであるが知らぬ人が見ると一寸生意氣のやうに感ぜられる。晴眼者でも素通しの眼鏡をかけてゐると見榮のや

うに思はれないでもないが、掛けてゐる人には最初の動機はどうでも、しまひには習慣となつて眼鏡を外すと物が見にくいといふ人がある。若し、埃除けのために眼鏡をかけるのであつたら、素通しでも黒眼鏡でも、どちらでもいい譯である。黒眼鏡は虹彩が悪い場合などに掛けるものであるが、盲人は角膜實質炎で黒目が白く濁つたり、又白目に赤い條が出たり、或ひは眼瞼がたゞれたりして醜くなつた時、それを隠すために掛けるのである。盲人だからといつて黒眼鏡をかけなければならぬといふ理窟はない。兩眼を閉ぢてゐても少しも容貌の醜くない人がある。寧ろ、ある淋しさと、素直さを現はして感じのいゝものである。揚雲雀の聲にきゝとれてゐる春琴の顔にもさういつた感じが表はれてゐたのではなからうか。やさしく兩眼を閉ぢてゐる盲人が黒眼鏡をかけると却つて容貌を害ふものである。私は盲學校の或る音楽科の先生が、演奏會の時だけ金縁の黒眼鏡を掛けられるのを見て御注意申上げたことがある。兩眼を閉ぢたまゝの容貌の方が、黒眼鏡をかけてゐるよりもいゝと思つたからである。先生は大層お喜びになられて黒眼鏡をかけられるのをお止めになられた。だが黒眼鏡をかけた方が似合ふ人もある。黒眼鏡でも、眞黒なレンズより薄墨色の方が上品に見える。顔の大きさとレンズの大きさがびつたり調和しないことには似合ふとは云へない。

#### 四、悟　　り

盲學校の生徒と思はれるのは嫌だといつて、通學生の中には帽子に他校の徽章をつけてゐた者もあつた。體操の時だけは誰かの帽子を借りて被るのである。又寄宿舎の生徒でも外出の際には中折を被つてゐた者もあつた。これは中年で盲學校に入つた半盲生のすることである。然しこれを目して直ちに虚榮心が強いからだとはかりいふことは出来ないと思ふ。癩病患者の中でも、まだ病氣が輕くて僅かに眉毛が薄くなつてゐる程度の者は癩療養所に入るのを厭がるさうである。そして自殺を企てたりする者もあるさうだ。この惱みは、癩病患者になり切れぬから起るのださうである。半盲生もこれと同じだと思ふ。

私が在學中に、音楽科に谷さんといふ女生徒が居た。妹さんも盲學校に入つてゐた。二人共半盲生で眼球に異状がないので晴眼者と少しも變りがなかつた。姉さんの方は中等部、妹さんは初等部に在學してゐた。東京育ちの人でお父さんは上野の美術學校を出られた畫家である。美術家が娘さんを二人も盲學校に入れてゐるといふのは、聞いたゞけでもお氣の毒である。お二人共電車で通學してゐた。或る日、私は姉さんの同級生からこんな事をきいた。谷さんは電車の中でも學友と話し

をしてゐる時に、それが學課に關することであると、靴の中から點字盤を出して書き取られるさうである。乗客達は、ポツリ／＼紙に穴を開けて書く點字を物珍らしさうに見てゐるさうであるが、谷さんは一向平氣ださうである。十六、七の年頃で、視力がありながら少しも外聞に捉はれない床しい心、見る人は何と思ふか知らないが、自分の運命に従順で眞實に生きてゆく人は本當に幸福であると思つた。

### 盲學校と社會

私は盲學校を卒業すると直ぐ或る市立の病院に勤めることになつた。盲學校に入る時も漠然とした氣持で入つたのであるが、卒業する時も何の心構へもなかつた。病院の看護婦さんが私に向つて、

「どこの學校をお出になつたのですか」と訊いた。

「東京盲學校です」

と答へると、

「まあ」

といつて凝つと私の顔を見詰め、

「お氣の毒ですわねえ」

といつた。(悪いことをきいたといふやうな顔をしてゐた。)

私の治療してゐる患者の中にも、

「マツサージは一體どこで教えるんですか」

と聞く者があつた。

「盲學校で教へます」

と答へると、

「ええ、どこの學校ですつて?」

「めくらの學校です」

「えッ、盲啞學校ですか」

「さうです」

「では貴方も盲啞學校を出られたんですか」  
「さうです」

患者の顔には出身學校を聞かなければよかつたといふやうな後悔の色が、あり／＼と表はれてゐた。さうかなあ、そんなに盲學校といふと世間では氣の毒に思ふかなあ、と私は考へた。

病院では皆親切であつた。外科の手術があるときいて、私は一度も觀たことが無いので見せて貰ひたいと言つたら、體格のがつちりした醫長さん(内田英雄博士)は、

「ようがすとも」

と快よく頷づかれた。そして手術室で色々説明して下さつた。他の先生も丁寧に教へてくれた。

「又手術のある日にいらつしやい」と仰言つた。親切なものだなあと思つた。

出勤簿へ判を押しに行つた時、事務の人が、

「何でしたら私が押して上げませう」

と云つてくれた。私が眼が悪いので判が押しにくいと思つたらしいのである。私は有難いことだと思つた。盲學校に居る時は、これでも私は眼が見える方だつたので全盲の生徒の面倒を見てやつたが、社會に出たら私が世話を受ける身となつた。

住めば都とやらで、世間から氣の毒だと思はれる盲學校も、七年も住み馴れて見ると心のふるさとである。私は學校を卒業すると、勤め先に近い霞町に下宿してゐたが、初めの間は風呂に入る時にも盲人と一緒に入りたいたいと思つて、石鹼と手拭ひを持つて寄宿舎までわざ／＼出掛けたのである。麻布霞町から雜司ヶ谷の寄宿舎までは市電で優に一時間はかゝる。途中で三度ばかり乗り換へをする。下宿屋の直ぐ近くに錢湯があるので盲學校の寄宿舎まで一時間餘も電車で揺られて風呂に入りに行くなんてよつほどの物好きとしか考へられないであらう。これといふのも今迄盲學校といふ世間とは全くかけ離れた所に住んでゐたので、急に眼開きの社會に出ると何だか頼りなく思はれて仕方がなかつたからである。

當時、下宿料は朝夕二食で月三十五圓であつた。部屋は六疊で、三尺の押入が一つ附いてゐた。霞町からわざ／＼寄宿舎まで風呂に入りに行く位だから、盲生徒を下宿に連れて来るのは當然である。私は盲生徒の送り迎えが大變なので、半盲の生徒と一緒に遊びに来るやうに言つた。生徒たちは喜んで下宿へ訪ねて來た。私は下宿屋に生徒の食事を頼んで一緒に飯を食つた。二食で月に三十五圓だから寄宿の賄と違ひ、相當御馳走が出る。刺身などは珍らしくない。生徒たちは「旨いな



あ」と言つて、お菜も飯も残らず食つてしまつた。夜は泊める。夜具も下宿から借りた。翌日朝飯を食つて生徒たちは寄宿に歸つた。斯うして私の所へ盲學校の生徒が時々遊びに来ては泊つて行つた。ところが月末に勘定を拂ふ時下宿料が倍以上になつてゐるので驚ろいた。盲生徒たちは電車賃を使ふだけだが、こちらは尻拭ぐひが大變だ。餘分に食事を注文するとすゝぶん高いものだなあと思つた。私はこれに懲りて盲生徒が遊びに来ては夕飯位は出すが泊めないことにした。菓子もケーキのやうな柔らかな舌觸はりのいゝ物は直ぐ食はれてしまふので、一つ一錢の石のやうに固い堅パンを買つて出すことにした。

「これなら無暗に食へないだらう」

と云つたら、

「こいつは一つ食つたら澤山だ」

といつて笑つてゐた。

私は社會に出てから、世間では盲學校なんか問題にしてゐないといふことが、追ひ／＼分つて來た。私は前校長秋葉先生が「地方に行つて東京盲學校長と云つても世間ではちつとも認めてくれな

い、女學校や中學校長の方がまだ通りがよい」と話されたことを思ひ出した。或る日、初冬であつたと思ふが曇の降る午後、私は病院に勤めてゐるお醫者さん二、三人と一緒に長阪の更科蕎麥屋に行つたことがある。その時私は先生方に向つて、

「どうも世間では出身學校によつてその人の値打ちを決めてしまふ傾向があるやうに思ひます。なる程、私は盲學校を出た者ですが、これは眼が悪いから入つたので、盲學校だからといつて何も人物がどうのといふことは言へないと思ふんです。皆さんは私に對して理解を持つてをられるから盲學校を出て氣の毒だと思つて下さるのですが、何にも知らない人は盲學校ときいたゞけで輕々しく人物を決めてしまひます。それがどうも残念です」

と言つたら、某醫專を出た一人のお醫者さんが、

「貴方の仰言ふことは私の身にも當て嵌ります。私は醫者だが醫專出なので肩身狭く思ふことがあります。私は中學時代に父に死に別れ、大勢の兄弟があり、長男として早く身を立てなければならぬので醫專に入つたんですが、醫者仲間でも醫專といふと低く見ます」

と語られた。私は伊東重氏の「養生哲學」を思ひ出した。その中に、身體が丈夫で頭が良くて財産があつたら申し分がないといふやうなことが書いてあつた。夏になると醫科の學生が暑休を利用

して病院へ見學に来る。或る學生は私に向つて自分は私學だから駄目だといふやうなことを言つてゐた。學校といふものは社會に出るとそんなにその人を左右するものであるかと、卒業してから初めて考へるやうになつた。私學であらうと醫專であらうと醫者には變りはないのだから、その仕事に眞面目だつたらそれでよささうに思へるが、それだけでは満足が出来ないものかなあと思つた。立派な普通の學校でさへこうなのだから、なるほど盲學校など社會で認めないのは當り前かも知れないと思つた。だがそんなことがあつては、第一、長年學資を續けて丹精してくれた親に對して甚だ申譯ない話である。社會は今少し子を育てた親の氣持ちになつて考へて見る必要があると思つた。トルストイの「闇の力」の中に、その人が死ぬ時のことを考へたら憎めるかといふやうなことが書いてあつたが、私は親心を考へて見ろといひたくなる。私と同級のKはこの間久しぶりで田舎に行つて来たさうだが、先づ我が家に歸つて第一に感じたのは何時も變らぬ親の慈愛だつたさうだ。Kの滞在中、夜は寒いといつては夜具蒲團の中に湯たんぽを入れ、厚い毛布をかけ、夜中に父が便所に起きた時、襟元に風が入らないやうに蒲團をかけ直してくれ、風呂が沸いたといへば自ら風呂場に行つて湯加減をしてくれるなど、細かいことにも心を砕く親の慈愛には今更感激に堪えなかつたと言つてゐた。而もKの父はこれほど心を勞しながら「母さんが生きてゐたらなあ。俺は男

で氣がつかぬ」と云つてゐたさうである。Kは長年下宿生活をしてゐて何かにつけて金、金、と金ばかり取られてゐるので家に歸つて色んな御馳走をされると、一文も拂はないで食つてゐるのが何だか勿體ない氣がしたさうだ。自分のやうな詰らない者でも親はこうして大事にしてくれるのかと思ふと有難くてならなかつたと云つてゐた。どこの親もみんな斯うなのであらう。

病院の人たちは皆私に對して深い同情と理解を持つてをられるので、私も仕合せである。私は病院に勤めてから初めて濁逸語を學んだのであるが、院長初め諸先生は私がきゝに行きさへすれば多忙な時でもよく教えてくれた。中には圖書室から態々辭書を持つて來て親切に教へてくれた人もあつた。院長など來客中でも私が行くと快よく教えて下さつた。渡る世間に鬼は無いといふが全くだ。

或る日、私は病院の歸りに折柄の突風にあほられて帽子を吹き飛ばされてしまつたことがある。私は帽子が慶應幼稚舎前の橋の上をコロ／＼轉がつて行つたのをチラと見たが、その先は見失つてしまつた。川の中に落ちたのかも知れないと思つた。私は橋の上から川面を眺めた。若し川の中に落ちたとしても私には見える道理が無いのだが、昔眼の見えた時の習慣が無意識の中にさういふ動

作をさせたのであらう。私がぼんやり佇んでみると、橋の向ふから幼稚舎の生徒が数人、元氣よくやつて来た。見るとその中の一人が私の帽子を持つてゐるではないか。橋の向ふまで吹つ飛んで行つたらしい。生徒は私に「ハイ」といつて帽子を渡すと、その儘友達と楽しさうに話しながら行つてしまつた。帽子を拾つてやつたことも忘れたかのやうに――。

幼稚舎は病院の近くにあるので私は毎朝生徒と一緒にいる。だが私は今迄生徒の服装が可愛いと思ふ以外には何も思つてゐなかつた。それが親切にも私の帽子を拾つてくれ、私に禮を言ふ道も與へず、さつさとして行つてしまつた、その淡泊な態度がすっかり私の氣に入つて、それから後は幼稚舎の生徒が全部好きになつた。一人善い事をするとその仲間の者までが善いやうに思はれる。

それと同じやうに盲學校から一人でも立派な人が出れば、社會はその人を通じて盲人を理解し盲學校に對する認識も深められるであらう。盲人救濟事業も大切であるが、それよりも盲人自身の自覺がもつと大切であると思ふ。

昭和十六年十二月一日印刷  
昭和十六年十二月五日發行



不許復製

◎【定價金一圓七十錢】

著者

野地シゲル 繁

發行者

飯尾謙藏  
東京市小石川區江戸川町十八

印刷所

萩原印刷所  
東京市牛込區山吹町一九八

發行所

東京市小石川區江戸川町十八番地  
會員番號 一〇〇六七

交 蘭 社

電話小石川五二〇一  
振替東京四〇二七九  
配給元 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

交 蘭 社 發 行

加藤楸邨	吉田冬葉	尾山篤二郎	佐々木久	西條八十	水原秋櫻子	永田義直	岩田九郎	同	水谷まさる	星野武雄
俳句の表現の道	俳句の作り方と味ひ方	短歌の作り方新講	漢詩の作り方新講	新らしい詩の味ひ方	新選俳句季語解	蕪村秀句鑑賞	芭蕉俳文評釋	母なればこそ	父なればこそ	明治天皇御製新講
金九十錢	金一圓五十錢	金一圓五十錢	金一圓五十錢	金二圓六十錢	金二圓	金九十錢	金一圓卅錢	金九十錢	金九十錢	金一圓五十錢
送九錢	送十四錢	送十四錢	送十四錢	送十錢	送十錢	送十錢	送十錢	送九錢	送九錢	送十四錢

295  
82

